大学における社会福祉教育の、科目間の関連性と、学生の意欲について
－シラバスを用いた分析と考察－

○　東北福祉大学　　氏名　似内　　寛（6964）

［キーワード］大学教育、社会福祉教育、学習意欲

１．研 究 目 的

社会福祉の教育は、社会福祉士や介護福祉士などの資格の取得のみではなく、広範な知識や論理的な思考力を身につけ、社会福祉の実践に役立てられる人材を養成しなければならない。そのために学生は、履修科目を選択する場合に、履修モデルで「事前に履修するべき科目」「事後の履修するべき科目」などと指示のある科目の関連性について、よく理解し、知識の積み重ねが必要な場合は、順序よく履修することが必要である。そして科目間の関連性を理解し「基礎から応用」、「理論から実践」へと知識や技能を深めて行かなければならない。しかし履修モデルやシラバスに明記されている以外にも、さまざま科目の中に内容に関係性を見つけて、知的好奇心を刺激することができれば、自発的な学習活動を動機づけることにつながるのではないだろうか。本報告では、A 大学社会福祉学科のシラバスを用いて、履修モデルなどの科目編成側が関連づけている科目間と、必ずしも意図していない科目間にそれぞれ類似性があるのか、考察する。

２．研究の視点および方法

社会福祉士の養成校である A 大学の､社会福祉学科のシラバスに出現する語彙を抽出し、語彙の出現数によるクラスター分析を行った。この分析により、シラバスに使用される語彙に共通性のある科目をグループ分けする。分析対象は学科の全科目である。

語彙の抽出には mecab を使用した。mecab は「京都大学情報学研究科　日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所共同研究ユニットプロジェクトを通じて開発されたオープンソース形態素解析エンジン」である（http://mecab.googlecode.com/svn/trunk/mecab/doc/index.html)。mecab を使用して形態素に分解し、データベースに登録した。この過程で助詞、接尾語、助動詞、記号として分類された単語除外した。分析対象の科目は 222 科目。登録された語彙は 6415 語である。科目ごとの語彙出現回数の集計は Microsoft Access2010 を使用した。クラスター分析は統計解析システム R 2.15 を使用した。

３．倫理的配慮

文献及び資料を用いるため、引用部分を明確にすること等、日本社会福祉学会研究倫理

指針に従い研究を行った。

４．研 究 結 果

階層的クラスター分析では「最遠隣法」「重心法」「ウォード法」を行い、もっとも顕著にグループ分けすることができた「ウォード法」による結果を考察の対象とした。分類された科目グループは次の通りである。「A.ソーシャルワーク実習に関係した科目グループ」「B.保育内容、保育方法、子どもの保健、食育、発達心理学など」「C.語学科目」「D.地域研究、スクールソーシャルワーク、福祉 NPO、法学など」「E.コミュニケーション、日本文化、外国語など」「F.精神医学、リハビリテーション医学、カウンセリング、障害者の心理など」「G.ジェンダー論、労働法、家族援助論、宗教学、近現代史、日本史など」「H.法学、哲学、看護学、情報処理など」「I.保育内容、生徒指導、身体表現、芸術、ボランティアなど」「J.社会福祉経営、国際福祉・社会学など」「K.ソーシャルワーク方法論など」「L.精神保健学・精神保健援助技術など」「M.障害者コミュニケーション、ソーシャルワーク演習、ケアマネージメント演習、高齢者福祉論、医療福祉論、児童福祉論など」「N.地域福祉論、地域社会学など」「O.公的扶助・社会保障など」「P.保健医療など」「Q.社会福祉調査、社会福祉行財政、社会福祉言論、社会福祉入門、社会福祉史など」。A、O、P グループは、ほぼ同じ分野の科目がグループ化されている。また B は保育内容の科目では、子どもの発達や発達心理学と関連した科目のシラバスに、共通の語彙が使われていることがわかる。D、F、Q グループも内容の関連性が類推できる。また I、J、M は関連性を類推しにくいグループである。I グループに共通する頻出語は（参加,活動,生活,指導,子ども,文化,実践）などである。

5. 考 察

山下は、学習意欲に（１）積極性・能動性、（２）内発性（知りたい、わかりたい、学習したいという動機）、（３）価値指向性（「知らないことを知る」「できなかったことができるようになる」「自己を伸ばし高める」という価値を指向する）という性質が含まれていると述べている（山下剛編『学習意欲の見方・導き方』教育出版）。科目間の類似性や関連性を示すことは、内発的で価値指向的な学習意欲の向上につながると考えられる。しかし科目間の関係は、「高齢者や児童」といった「対象領域」や、「学問領域」、「調査的アプローチ」などの方法論、「実践重視、理論や知識の習得重視」などの学習面など、種々の側面がある。語彙の分析以外に、どのような分類を行う必要があるのか、教育学や学習心理学の研究成果も踏まえ考察する必要があるが、今後の課題である。